

職員の研究活動

柴田 正子

私が京都大学へ就職したのは1962年です。農学部へ2年、附属図書館の洋書目録へ16年、法学部へ18年間在職しました。附属図書館にいた当時（1965年頃）は、大学紛争などで騒がしく、個人的にも、結婚、出産、育児と忙しくむなし日々が何年か続きました。1975年頃からやっと落ち着きを取り戻し、5～6人のグループで土曜日の昼から2時間ほど目録の勉強会を始めました。これは、丸山 昭二郎著『目録法と書誌情報』をテキストとした目録に関する基本的な学習でした。この時、「目録原則国際会議」の覚書（パリ原則）を原文で読んだことがあります。皆と一条一条議論しながら読んでいく楽しさは今でも思い出に残っています。一方、職場では、目録の機械化や、英米目録規則の改訂などが話題となり、その為のマニュアル作りと学習を目録掛としてやってきましたが、全体的には、館員の研修は貧弱で不満とあきらめムードは続いていました。

1980年代に入り、京大職員組合は「職場と仕事の見つめ直し」「働きがいのある職場作り」という基本方針をうち出しました。これをうけて図書館部会では「図書館学校」を開催することになりました。毎月1回、昼休み、日常業務をやっている図書館員が講師となり、現場での問題点、参考にした文献の調査方法および紹介、見出した解決法と結果、という基本線に基づいて資料を作成し、報告するといった形

式で行われました。ここで取り上げたテーマは下記の通りです。

以上のように、テーマは図書館学全般にわたるものであると同時に、報告者も全学部に及ぶものでした。内容もかなりアカデミックなものから、実務に即役立つものまで、資料も大部のものもありました。参加者も毎回京大全図書館員数の15%が出席し、盛況の内に終わりましたが、報告者、参加者ともに図書館員にとって自己研修・共同研修が十分出来、自らの仕事を再検討するきっかけになったと思います。この影響で全国大学図書館職員の研究組織である大学図書館問題研究会では「大図研学校」が数年続き、京大の中にも、[MARC学習会]、「参考図書研究グループ」、「理工学文献研究会」など、数々の研究グループが誕生し活動してきました。この1980年代はまさに図書館員の自主研修の花盛りであり、私にとっても思い出深い十年間となりました。1990年代には官製の研修会が開かれるようになり、参加する機会も増えてきましたが、まだまだ十分なものとは言えません。

私は、図書館員の研究活動は自主研修が基本であるべきだと思います。図書館員一人一人が問題をもって集団で解決していく姿勢が大切ではないでしょうか？ こうすることによって自分の仕事に対する意欲が向上し、集団としてレベルアップしていくと思います。

（しばた まさこ：元法学部図書室整理掛）

回次	テーマ	報告者（部局）	参加者数
第1回	分類（図書館学）の展開を巡って	片山（附図）	28名
第2回	図書の収集と選択法に関して —選択の方法と実態—	堤（経）	40名
第3回	利用案内—法学部図書室の経験から—	伊藤（法）	45名
第4回	二次資料について—その解題と使い方—	船越（経）柴田（法）白神（工）	56名
第5回	学術雑誌の管理・運用について	林（工）	33名
第6回	医薬学関係図書解題 —二次資料シリーズ・パート2—	篠原（医）	36名
第7回	Citation Indexについて—SCIの構成—	柴田（法）	46名
第8回	資料提供サービスについて	水野（医）	29名